

Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7の研究(3)*

尾 園 絢 一

1. 問題
2. 議論の概要
3. 訳注

1. 問題

意欲活用 (Desiderativ) は主語の意欲を表す (subjektbezogen) 動詞カテゴリーである。パーニニが定めるところによれば、欲求の意味を表すために接辞 *saⁿ* が動詞語基の後に導入され、意欲語幹が形成される：

Pāṇ. III 1,7 *dhātoḥ karmaṇaḥ samānakartrkād icchāyām vā* [*san* 5, *paraḥ* 2, *pratayaḥ* 1]

動詞語基 [が示す行為] が [欲求行為の] 対象となり、[欲求の主体と] 同じ主体を持つ場合、その後に、欲求の意味で *saⁿ* が任意に用いられる。

「～を欲する」という欲求 (*icchā-*) を表す行為 (V_1) の主体と欲求の対象となる行為 (V_2) の主体とが一致することにより、「～すること (V_2) を欲する (V_1)」という意味を表すことになる。つまり主語の欲求を表している。パーニニ文法学によれば、意欲語幹 (*sananta-*) は不定詞 *-tum + icchati* という分析表現 (analytic expression) によるパラフレーズが可能である。しかしながら、パーニニの規則自体はこの交換可能性に何ら言及していないため、パーニニ自身が意欲語幹と不定詞 *-tum + icchati* とが同じ意味を表すと理解していたかは不明である。カーチャーヤナはこの二つの表現が完全に同じとは考えていない。

* 本稿は尾園2014、2015の続編である。Mahābhāṣya研究会 (2014年12月広島大学) において、小川英世教授 (広島大学) をはじめとする研究者の方々から多くのご教示と情報をいただいた。川村悠人氏 (日本学術振興会特別研究員) からは本研究に関する貴重な資料をいただいた。心から感謝申し上げます。尚、底本、略号、記号は尾園2014、2015を継承する。

また *asmā luluthiṣati* 「岩が今にも転がろうとする」のように意欲を持たない無生物を主語とする意欲語幹が使用されることがある¹。こうした例に基づいて、主語の意欲を表す意欲語幹は近接未来をも表し得るという見解がある²。しかしながら、これは近接未来という独立の機能ではなく、「主語の意欲」から展開したものと理解される。HEENEN 2006 : 51によれば、出来事の進展途中 (*le développement intermédiaire d'un événement*) は未来における実現に関連づけられた事態であるから、近接未来の意味は意欲語幹の機能によく適合する。未来語幹は未来の行為に対する現在の意図を表すの対し、意欲語幹は主語が実際にその意志内容を実行に移そうとしていることを表す(堂山2006 : 58)。但し、意欲語幹が無生物の意欲を比喩的に表し得るとはいえ、この種の表現に対しては様々な説明が考えられよう。まさにこうした問題がMahābhāṣya on Pāṇ. III,7において詳しく議論される。Vārt. 12-15において、*icchā-*「欲求」を表すカテゴリーである、意欲語幹がどのようにして「今にも～しようとする」を表し得るのかということについて詳細な議論が展開される。

2. 議論の概要

Mahābhāṣya では Pāṇ. III,7の一つ一つの文言について必要性が検討されている。尾園2014、2015において、*dhātoḥ* 「動詞語基の後に」、*karmanāḥ samānakarṭṛkād* 「[欲求行為の] 対象であり、同じ行為主体を持つ [動詞語基] の後に」の文言に関する議論を取り上げた。

次に議論の対象となるのは、*vā*「任意に」の文言の必要性である。Vārt. 9によれば、*vā* は無意味である (§ 27)。なぜならば、意欲語幹と不定詞 *-tum + iṣ* とが表示する意味は異なっており、交換可能ではないからである。従って *sa^N* の導入は任意 (*vā*) ではなく常に起こらねばならない。また Vārt. 10によれば、意欲語幹と不定詞 *-tum + iṣ* とが意味的に等価であると仮定した場合、**tumunantād vā tasya ca luk* 「*-tum_u^N*で終わる語の後に *sa^N* が任意に導入され、そして *tum_u^N* の代わりに *luk* (ゼロ) が起こる」と定式化が可能となる (§ 28)。あるいは *kuryāmīti icchati* 「彼は“私は為したい”と欲する」のような、1人称願望法 + *iṣ* の分析表現とも交代可能であり、**linuttamād vā tasya ca luk* 「1人称願望法の語尾の後に *sa^N* が任意に導入され、そして *l^{IN}* の代わりに *luk* (ゼロ) が起こる」という定式化も可能である (§ 29)。もし意欲語幹を用いた統合表現が分析表現と意味的に等価であるならば、このように定式化することで規則を短縮

¹ Cf. ドイツ語 *wollen* (Duden 1998 : 102) : *Der Stein wollte den Abhang hinunterrollen* 「石が斜面を転がり落ちようとした」。

² THIEME 1960 : 313 = *Kl.Schr.* 374参照。

することが可能になるので、Pāṇ. III 1,7の存在意義がなくなる。従って当該規則の任意性は、統語表現と分析表現に関するものではない。

Vārt. 12によれば、意欲語幹には*icchā*-「欲求」の他に、*acetana*-「意識を持たないもの」について*āśaṅkā*-「(話者の)懸念」を示す機能もある (§30)。「懸念」とは、「今にも～しようとする」という近接未来を指している。だが、*śvā mumūrṣati*「犬が今にも死のうとしている」のように、意識を持つ、生き物の場合でも「懸念」を表すことがあるため、*acetana*-の文言は必要ない (§31)。意識を持つものを主語とする意欲語幹が「懸念」をも表すならば、*vā*「任意に」という文言によって、*icchā*-「欲求」か*āśaṅkā*-「懸念」のいずれかの意味で用いることが可能になる。

或いはそもそも「懸念の意味で」という文言は必要ない。たとえ主語が無生物であっても、話者は外界の出来事から欲求を推測することができる (§32)。或いは比喩表現によって理解されるべきである (§33)。但し、パタンジャリによれば、定動詞において比喩表現は成立しない (§34)。比喩表現でないとしたら、「欲求」に類似したものの (*iccheva*) を表す (§35)。或いは、無生物も意識を持つものと考えらるならば (§36)、無生物を主語とする意欲語幹も*icchā*-「欲求」によって説明されるので、*āśaṅkā*-「(話者の)懸念」を追加する必要はない。

3. 訳注

《*vā* の文言に関する論題》

§27 【*vā* の文言は無意味とする立場】

Vārt. 9

vāvacanānarthakyaṃ ca tatra nityatvāt sanah /

そして任意 (*vā*) という言明は意味がない、そこ (統合表現の領域) において、*saⁿ* は常に [導入される] から。

Bhāṣya

vāvacanaṃ cānarthakam / kiṃ kāraṇam / tatra nityatvāt sanah / iha dvau pakṣau vṛttipakṣas cāvṛttipakṣas ca / svabhāvataś caitad bhavati vākyam ca pratyayaś ca / tatra svābhāvike vṛttiviśaye nitye pratyaye prāpte vāvacanena kim anyac chakyam abhisambanddhum anyad atah samjñāyāḥ / na ca samjñāyā bhāvābhāvāv iṣyete/ tasmān nārtho vāvacanena /

そして任意 (*vā*) という言明は意味がない。何故か。そこ (統合表現の領域) では、*saⁿ* は常に [導入される] から。ここ (我々の文法体系) では、二つの選択肢がある、[即ち] 統合表現の選択肢と統合表現以外の選択肢とが。そして自ずから、これが生じる：文 (*kartum icchati*) と接辞 [で終わる語] (*ci-kīr-ṣa-ti*) とが。そこ、つまり本来

的である統合表現の領域で、接辞が常に適用されるとしたら、他の何が、任意という言明と結びつくことができるのか；この用語（=pratyaya）以外に。そして、用語が[ある時には]用いられ[ある時には]用いられないことは望まれない。それ故、任意(vā)という言明は意味がない。

Pradīpa

vāvacanānarthakyaṃ ceti / vṛtter ekārthībhāvaviṣayatvād vyapekṣāviṣayatvāc ca vākyasya bhinnārthatvād bādhyabādhakabhāvāprasāṅgād iti bhāvah //

na ca saṃjñāyā iti / anarthah pratyuta vāgrahaṇād bhavati pratyayasamjñāyā vikalpe sati tannibandhanakāryavikalpaprasaṅgāt //

「*vāvacanānarthakyaṃ ca*」以下について。統合表現は一つの意味となること（意味統合）、一方、文（分析表現）は互いに[意味の結びつきを]期待することを対象し、[統合表現と分析表現とは]意味が区別されているので、排除するものと排除されるものという関係は想定されないので[任意という言明は無意味である]。以上が意図するところである。

「*na ca saṃjñāyāḥ*」以下について。それどころか逆に *vā* の文言があると、不都合が生じる。接辞[で終わる語]という用語に選択[の余地]があるならば、それ（用語）に依拠した操作に選択[の余地]が生じるから。

解説

パーニニ文法学によれば、統合表現 (vṛtti) と分析表現 (vākya) という2つの表現方法によって同じ意味を表すことができる。尚、パタンジャリはこのような交換可能性を *mahāvibhāṣā*-「大交替 (Großalternative)」と呼ぶ (WEZLER 1975: 7)。欲求の意味を表す場合には、意欲語幹という統合表現と不定詞 *-tum + iṣ* という分析表現の等価性が問題となる。だが、Vārt. 9によると、*cikīrṣati* 「なそうとする」という統合表現と *kartum icchati* 「なすことを欲する」という分析表現とは意味的に等価ではない³。欲求を表し、その欲求の主体と欲求の対象となる行為の主体が同一の時は、常に *saⁿ* が導入され、任意に *saⁿ* が導入されたり、されなかったりすることはない。*saⁿ* の導入が任意でないとする *vā* という文言は *pratyaya* の導入以外に結び付けられるものがないので必要ない。

³ この問題については、尾園2014: (33) – (35)参照。

§ 28 【短縮した規則の提示 1】

Vārt. 10

tumunantād vā tasya ca lugvacanam //

*tum_u^N*で終わる語の後に任意に [*sa^N*が導入され]、そしてそれ (*tum_u^N*) の代わりに *luk* [が起こるといふ] 言明が [なされるべきである]。

Bhāṣya

tumunantād vā san vaktavyas tasya ca tumuno lug vaktavyaḥ / kartum icchati cikīrṣati //

*tum_u^N*で終わる語の後に、*sa^N*が任意に [導入されると] 明言されるべきであり、そしてその *tum_u^N* の代わりに *luk* [が生じると] 明言されるべきである。即ち *kartum icchati* > *cikīrṣati*。

Pradīpa

tumunantād iti laghv evaṃ lakṣaṇaṃ bhavatīti bhāvah //

vacanasāmarthyāc copapadaśravaṇaṃ bādhitvā pakṣe tadīye 'rthe sanpratyayo bhavati / icchāgrahaṇaṃ pratyayārthanirdeśāyāvaśyaṃ kartavyam //

atra codayanti — tumunantasya padatvāt tumuno luki kṛte jighāṃsatiyādaḥ nalopādīni prāpnuvantīti //

naiṣa doṣaḥ / tumuno luko bahiraṅgatvād asiddhatvān nalopādīni na bhaviṣyantīti / etasmins tu sūtranyāse “dhātor” iti sano vidhānābhāvād ārdhadhātukasamjñā na prāpnotīti “iko jhal” (Pāṇ. I 2,9) iti kittvavidhānaṃ jñāpakam āśrayaṇīyam iṣṭasiddhaye //

「*tumunantād*」以下について。このように (i.e. *tumunantād vā tasya ca luk*) 規定は軽く (簡便に) なる。以上が意図するところである。また [規則の] 言明効力があるから、*upapada* (= *icchati* 等の欲求を意味する動詞) を聞くことを排除して、任意に、そうした意味 (欲求) で *sa^N* という接辞が生じる。*icchā-* の文言は接辞の意味を示すために、必ず設けられるべきである。

[反論] これについて、[人々は次の反論を] 提起する：*tum_u^N*で終わるものは *pada* となるので、*tum_u^N* の代わりにゼロ (*luk*) [の代置] がなされると、*jighāṃsati* などにおいて *n* の *lopa* などが結果する。

[反論に対する答え] このような瑕疵はない。*tum_u^N*に [代置する] *luk*は、外に適用根拠を持つ (*bahiraṅga*) から、実現しないので、*n* の消失などは起こらないであろう。他方、このような規則が定式化されると、「動詞語基の後に」という *sa^N* の導入規定が生じないので、*ārdhadhātuka* の用語は結果しない。従って “*jh_a⁺* (= Obstruent 「阻害音」) で始まる (= *i⁺* を伴わない) *sa^N* は *k* を *it* とする” (Pāṇ. I 2,9) というように *k* を *it* と

するもの〔の導入〕の示唆が、望まれる〔語形を〕実現するために、根拠づけられる（正当化される）べきである。

解説

Vārt. 10によれば、もし Desid. *-sa-* と *-tum icchati* とが交換可能だとすると、Pāṇ. III 1,7 を設ける必要はなく、Pāṇ. III 3,158⁴に付随して、* *tumunātād vā tasya ca luk* 「*tum_n*^N で終わる語幹に任意に導入され、導入後に脱落する (e.g. *kr̥-tum_n*^N > *kr̥-tum_n*^N-*sa*^N > *kr̥-sa*^N...*cikīrṣa-*)」と定式化することにより規則を短くできることになる⁵。

Pradīpa では Vārt. 10 の定式化について、2つの問題が取り上げられている。一つは、*tumunantād* という文言があると、例えば、*jighāmsati* 「殺そうとする」 (<*han*) という形を作ることができない、という問題である。*kr̥* 接辞 *tum_n*^N は、「名詞語幹 (prātipādika)」⁶ および「不変化語 (avyaya)」⁷ の用語が与えられ、Pāṇ. II 4,82 に基づいて *s*^{UP} で終わるものと見なされる⁸。*s*^{UP} で終わるので、*pada* の用語が与えられ⁹、その結果 Pāṇ. VIII 2,7 により、*han* において *n* の *lopa* が結果する¹⁰：

- | | | | | | |
|-------|------------|---|-------------------------------------|--------------------------|--|
| (1) | <i>han</i> | + | <i>tum_n</i> ^N | | Pāṇ. III 3,158 |
| (2) | <i>han</i> | + | <i>tum_n</i> ^N | + <i>sa</i> ^N | Vārt. 10 on Pāṇ. III 1,7 (<i>tumunantād vā</i>) |
| (3) | <i>han</i> | + | ∅ | + <i>sa</i> ^N | Vārt. 10 on Pāṇ. III 1,7 (<i>tasya ca luvacanam</i>) |
| * (4) | <i>ha</i> | ∅ | + <i>sa</i> ^N | | Pāṇ. VIII 2,7 |

この反論に対して、次のように答える。*han* を構成する *n* は、当然動詞語基 *han* の存在を適用根拠とするので、*n* の脱落 (Pāṇ. VIII 2,7) は動詞語基の後に導入される *tum_n*^N (Pāṇ. III 3,158)、および *tum_n*^N の *luk* 代置 (Vārt. 10) に対して *antaraṅga* であり、逆に *tum_n*^N の *luk* 代置は *n* の脱落 (Pāṇ. VIII 2,7) に対して *bahiraṅga* である。*antaraṅga* の操作

⁴ Pāṇ. III 3,158 *samānakartr̥keṣu tumun[icchārtheṣu 157, dhātau 155, upapadam 1,92, paraś 2, pratyayaḥ 1]* 「欲求の意味を表示する動詞語基 (V₁) が^supapada であり、[動詞語基 (V₂) が] 同じ行為者を持つ時、動詞語基 (V₂) の後に *tum_n*^N が生じる」。

⁵ 但し、この定式化はノバーニニの意図するものではない (CARDONA 1976 : 146, DESHPANDE 1980 : 89)。

⁶ Pāṇ. I 2,46 *kr̥taddhitasamāsāś ca [prātipadikam 45]* 「*kr̥* で終わる語、*taddhita* で終わる語、複合語 (*samāsa*) も *prātipadika* [と呼ばれる]」。

⁷ Pāṇ. I 1,39 *kr̥n mejantaḥ [avyayam 37]* 「*m* と *e, o, ai, au* (*e^c*) で終わる *kr̥* [によって形成される語形] は *avyaya* [と呼ばれる]」。

⁸ Pāṇ. II 4,82 *avyayād āpsupaḥ [luk 58]* 「*luk* は *avyaya* の後で *ā^p* と *s*^{UP} の代わりに [生じる]」。

⁹ Pāṇ. I 4,14 *suptinantam padam* 「格語尾 (*s*^{UP}) および人称語尾 (*t_n*^N) で終わる [語形] は *pada* [と呼ばれる]」。

¹⁰ Pāṇ. VIII 2,7 *nalopaḥ prātipādikāntasya [padasya 1,16]* 「名詞語幹 [かつ *pada*] の最後の *n* の代わりに *lopa* が起こる」。

が起こる時点では、*bahiraṅga*の操作は成立していない¹¹。即ち*n*の脱落（*lopa*）が起こる時点では、*tum_n^N*の*luk*代置は成立していない。しかし*n*の脱落は名詞語幹又は*pada*の最終音において起こるので、*tum_n^N*の*luk*代置が起こった後の形に起こらねばならない。従って*tum_n^N*の*luk*代置が成立しなければ、*n*の脱落は起こらない。尚、Udyottaによれば、実際には、*tum_n^N*と*s^{UP}*の*luk*が起こった後にそれらを根拠として*pada*とみなすことはできないので、*n*の脱落は起こらない¹²。

もう一つの問題は、*tumunantād...*と定式化してしまうと*dhātoḥ*「動詞語基の後に」という文言がなくなってしまうので、*dhātoḥ*の文言を根拠とする*ārdhadhātuka*接辞の用語が与えられないということである¹³。その結果、*sa*の前に*i*を伴う形（e.g. *śiṣayiṣati*）を作ることができなくなる。従って、ここでは前の*Pradīpa*（§ 19）に出てくる反論を認めて、*dhātoḥ*の文言は必要ないとせざるを得ない。Pāṇ. I 2,9により、*i, u, r, l (i^k)*で終わる動詞語基に*i^T*を伴わない*sa^N*がつく場合に*guṇa*化が禁じられる¹⁴。このように*i^T*を伴わない*sa^N*を（例外的に）規定しているということは、*sa^N*が*ārdhadhātuka*接辞と見なされた結果、本来ならば*i^T*が挿入されるということを示唆している（*jñāpaka-*）。従って*dhātoḥ*の文言がなくても*sa^N*は*ārdhadhātuka*接辞として認められる。

§ 29 【短縮した規則の提示 2】

Vārt. 11

liṅuttamād vā //

1人称*l^{IN}*（Opt.）で終わる語の後では任意に [*sa^N*が生じる]

Bhāṣya

liṅuttamād vā san vaktavyas tasya ca liṅo lugvaktavyaḥ / kuryām iti icchati cikīrṣati //

1人称*l^{IN}*（Opt.）で終わる語の後で任意に*sa^N* [の導入が] 明言されるべきである。そしてその*l^{IN}*の代わりに*luk*が明言されるべきである。[例えば]、*kuryāmīti icchati* 「“私

¹¹ Paribhāṣenduśekhara L *asiddham bahiraṅgam antaraṅge*.

¹² Uddyota : *sansanniyogena vidhānāt bahiraṅgatvaṃ luka iti bhāvaḥ / vastutas tu suptumunor luki padatve naikadeśavikṛtanyāyāvātāraḥ tattvapratyabhijñābhāvāt ardhavikārāt / nāpi sthānivadbhāvaḥ tumunnantasya saṣṭhīnirdiṣṭatvābhāvāt* 「*sa^N*との一体化（*sa^N*の導入と連動すること）により、*luk*は[導入が]規定されるので、*bahiraṅga*である。以上が意図するところである。だが現実には、*s^{UP}*と*tum_n^N*の*luk*代置が起こる時、*pada*となることに関して、一部改変（*ekaśeṣavikṛta-*）の道理を降ろしてくることはない。半分も変化しているので、実体を同定できないから。原要素（*sthānin*）に準じた関係でもない、*tum_n^N*で終わる語は第6格語尾で示されていないから」。

¹³ 尾園2015 : (107).

¹⁴ Pāṇ. I 2,9 *iko jhal* [*san* 8, kit 5] 「*jh_h^L*（Obstruent）で始まる（つまり*i^T*を前に伴わない）*sa^N*は、*i, u, r, l (i^k)*で終わる動詞語基の後では、*k*を*it*とする」。

は為したい”と彼は欲する]、[つまり] *cikīrṣati* 「彼は為そうと欲する」

解説

ここではさらに、意欲語幹と交換可能な、別の分析表現として Opt. 1. Sg. + *icchati* を挙げている。 *tumⁿ* の場合と同じように、「*Iⁿ* の1人称の語尾が導入された後に任意に *saⁿ* が導入され、そしてそれ (*saⁿ*) に代わって *luk* が起こる」と定式化することによってストラを短縮することができることになる。

§ 30 [*āśaṅkāyām* 「懸念の意味で」] の文言の追加

Vārt. 12

āśaṅkāyām acetaneśūpasamkhyānam //

懸念の意味で、意識を持たないものについて [*saⁿ* が導入されるという] 追加が [為されるべきである]。

Bhāṣya

āśaṅkāyām acetaneśūpasamkhyānam kartavyam / aśmā lulūṭhiṣate kūlam pipatiṣatī /

kiṃ punaḥ kāraṇam na sidhyati /

evam manyate cetanāvata etad bhavati ccheti kūlam cācetanam //

懸念の意味で、意識を持たないものについて [*saⁿ* が導入されるという] 追加が為されるべきである。[例えば] *aśmā lulūṭhiṣate* 「岩が転がろうとする」、*kūlam pipatiṣati* 「斜面が崩れ落ちようとする」。

[問] それにしても、何故、[Pāṇ. III 1,7の文言だけでは] 確立しないのか。

[答え] 次のように [人] は 考える: 意識を持つ者には、この「欲求」なるものが生じる。だが斜面は意識を持たない。

Pradīpa

āśaṅkā saṃbhāvanā. tadviśiṣṭārthābhidhāyino dhātoḥ svārthe pratyayaḥ // lulūṭhiṣata iti / ruṭha luṭha pratīghāta¹⁵ iti dyutādiṣu paṭhyate / vartamānasamīpya (Pāṇ. III 3,131) iti latpratyayaḥ //

āśaṅkā-「懸念」とは予期することである。それに(「懸念」)によって特徴づけられた意味を表示する、動詞語基の後に、[動詞語基] 自身の意味で、接辞が [生じる]。[例えば] *lulūṭhiṣati* 「今にも転がろうとする」。「*ruṭh^a*、*luṭh^a* は衝突の意味で」と *dyut* (DhP I 777) 以下 [の動詞語基群] において唱えられる。「現在に近接すること示す時 [*Iⁿ*

¹⁵ DhP I 783–785 *ruṭha luṭha luṭha pratīghāte*.

が用いられる]] (Pāṇ. III 3,131) ということに基づいて *I^{PI}* 接辞が [用いられる]。

解説

Vārt. で言われる *āśaṅkā-* 「(話者の) 懸念」は近接未来の意味に対応する。パーニニの規則は *sa^ṅ* が「懸念」を表す時に導入されるということを決めていないが、*lulūḥiṣati* 「(岩が) 転がろうとする」のような使用がカーチャーヤナの時代に知られていたものと思われる。岩や土は意識を持たないので、欲求を持たないことになるが、当該 Vārt. によれば、そのような物も主語として意欲語幹を使用することが可能であり、話者の「懸念」を表す。

§ 31 【*acetana-* の文言を不要とする解釈】

Bhāṣya

acetanagrahaṇena nārthaḥ / āśaṅkāyām ity eva / idam api siddhaṃ bhavati / śvā mumūrṣati // acetana- の文言は必要ない。*āśaṅkāyām* のみが [追加されるべきである]。これ (以下の文) が確立している：*śvā mumūrṣati* 「犬が死のうとする」。

Pradīpa

śunaś caitanyaḥ 'pi jīvitasya priyatvād vyādhyādyabhibhave 'pi tiryaktvān martum icchā nāsti 意識を持つものであっても犬という生き物には、[人々に] 愛されているから、病などが優勢であっても、動物なので、死ぬことを欲することはない。

解説

Vārt. 12によれば、欲求の意味ではなくても、「意識を持たない」(*acetana-*) のものたちに対して「懸念」(*āśaṅkā-*) の意味で用いられる。しかし、Bhāṣyaでは、例えば、「犬が死のうとする」のように、意識を持つものに対しても「懸念」の意味で用いられることから、*acetana-* の文言は必要ないとする。仮に意識を持つものにも「懸念」の意味で用いられることがあるならば、*icchā-* 「欲求」と *āśaṅkā-* 「(話者の) 懸念」の任意性が獲得される¹⁶。尚、ここで言われている *acetana-* とは、無生物というよりむしろ、意識、又は知性を持たないものと理解される¹⁷。

¹⁶ SCHARFE 1961 : 106, fn.3.

¹⁷ THIEME 1960 : 317 = *Kl.Schr.* 377.

§ 32 【*āśaṅkāyām* の文言を不要とする解釈 1】

Vārt. 13

na vā tulyakāraṇatvād icchāyā hi pravṛttita upalabdhiḥ //

或いは、[*āśaṅkāyām* の文言は必要] ない。[意識を持たないものと持つものとの間には] 等しい原因があるから。何故ならば、欲求の知覚は行動に基づいて[生じるから]。

Bhāṣya

na vā kartavyam / kiṃ kāraṇam / tulyakāraṇatvāt / tulyam hi kāraṇam cetanāvati devadatte kule cācetanane / kiṃ kāraṇam / icchāyā hi pravṛttita upalabdhiḥ / icchāyā hi pravṛttita upalabdhir bhavati / yo 'py asau kaṭam cikīrṣur bhavati nāsāv āghoṣayati kaṭam kariṣyāmīti / kiṃ tarhi / samnaddham rajjukīlakapūlapāṇiṃ dr̥ṣtvā tata icchā gamyate / kūlasyāpi pipatiṣato loṣṭāḥ śiryante bhidā jāyante deśād deśāntaram upasaṃkrāmati / śvānaḥ khalv api mumūṛṣava ekāntaśīlāḥ sūnākṣāś ca bhavanti //

或いは、[補足は] 為されるべきではない。何故か。等しい原因があるから。意識を持つデーヴァダッタと意識を持たない斜面には、[欲求の知覚が起こる上で] 等しい原因がある。何故か。[カーチャーヤナは言う:] 「何故ならば、欲求の知覚は行動に基づいて [つまり] 何故ならば、欲求の知覚は行動に基づいて生じるから」。ある人が蓆を作ろうとするものになっても、その人は「私は蓆を作ることになる」と声高に言わない。それなら何か。[例えば] 装いをして、縄と木杭を手にした者を [人は] 見て、それに基づいて欲求が理解される。斜面が崩れ落ちようとしている間にも、土塊は飛び散り、ひび割れが生じ、[斜面は] ある場所から別の場所へと動く (ずれる)。犬たちもまた周知の如く、[まもなく] 死のうとする時は、孤独を習慣とし、虚ろな目をしたものとなる。

Pradīpa

na ceti / kāryeṇecchānumīyata itīcchānumānakāraṇam kāryam liṅgam tulyam iti vāstavasada sattvānapekṣalokavyavahārāśrayakāryānumeyecchāśrayeṇa san prayujyate ity arthaḥ //

「*na ca*」以下について。作用を通じて欲求は推理される。従って欲求を推理する原因となる作用が [生物と無生物の] 等しい兆しである。以上のように現実に [意識が] あるなしに関わらず、世間のやりとり (慣習) に依拠した、作用を通じて推理される、欲求に依拠して、*saⁿ* が使用されるという意味である。

§ 33 【*āsaṅkāyām* の追加を不要とする解釈2】

Vārt. 14

upamānād vā siddham //

或いは比喩表現であるから、確立している。

Bhāṣya

upamānād vā siddham etat / katham / luluṭhiṣata iva luluṭhiṣate / pipatiṣatīva pipatiṣati //

或いは比喩表現であるから、これ（意識をもたないものに意欲語幹が用いられること）は確立している。どのように？ [例えば] *luluṭhiṣata iva luluṭhiṣate* 「あたかも [意識を持つものが] 転がろうと欲するかのよう、[岩は] 転がろうとしている」。 *pipatiṣatīva pipatiṣati* 「あたかも [意識を持つものが] 崩れ落ちようとするかのよう、[斜面は] 崩れ落ちようとしている」。

Pradīpa

upamānād veti / yad icchānimittam kāryaṃ tad acetaneṣu nāsti / yac cāsti na tad icchāyāḥ kāryaṃ iti matvā parihārāntaropanyāsaḥ //

「*upamānād vā*」以下について。欲求 [を認識する] 原因である作用、それは意識のないものたちの中には存在しない。また [意識のないものたちに] 存在するもの、それは欲求の作用ではないと考えて、別の回避策が提示されている。

解説

Vārt. 14では、岩などの意識を持たないものの欲求について何ら直接的なことは知りようがないが、我々自身が持っている欲求に喩えて、「(意識を持たないものが) 欲求する」という表現が成立することが言われている (THIEME 1960 : 319 = *Kl.Schr.* 380)。

§ 34 【比喩の見解に対する反論】

Bhāṣya

na tīnantenopamānam asti¹⁸/

人称語尾で終わる語（定動詞）を用いて比喩表現が起こることはない。

Pradīpa

na vai tīnanteneti / tīnantārthenety arthaḥ / kriyāyāḥ sādhyaiikasvabhāvatvād anīṣannarūpatvād idaṃ tad iti parāmarśaviṣayavastugocarativād upamānopameyabhāvasyedaṃ tad iti

¹⁸ Nirṇayasāgar 本 : *na vai tīnantenopamānam asti.*

*parāmaśābhāvād iti bhāvah / ivaśabdaprayoge tu adhyāropas tu vidyate / roditīva gāyati
nr̥yatīva gacchati devadatta iti / paripūrṇena ca nyūnasyopamānaṃ bhavati / kriyā ca sarvā
svāśraye samāpteti nyūnatvāsambhavas tasyām / tad uktam —*

「*na vai tiñantena*」以下について。「人称語尾で終わる語（定動詞）が示す意味（行為）によって「比喩が起こることはない」という意味である。行為は実現対象であることを唯一の性質としていて、完了していない相を持つものであるから；喩える側と喩えられる側という関係は「それはこれだ」という関連付けの対象である、事物を意味領域とするが、「行為には」「それはこれだ」という関連付けが生じないから。以上が意図するところである。だが *iva* の語を使用する時は、一方において、重ね合わせ¹⁹が見いだされる。[例えば] *roditīva gāyati nr̥yatīva gacchati devadattaḥ* 「鳴くように歌い、デーヴァダッタは踊るように進む」。また「性質を」完全に備えたものによって「性質が」欠けているものに対する比喩が起こる。だが全ての行為は自らの拠り所において完成している。従って、それ（行為）に「性質が」欠けることは起こらない。それが「以下の詩節において」言われている：

VP III 8,57²⁰

yenaiva hetunā hamsaḥ patatīty abhidhīyate /

ātau tasya samāptatvād upamārtho na vidyate // iti

雁が「飛んでいる」と表示される場所の原因、

それは水鳥に「も」実現しているので、比喩の目的は見出されない。

bhinnajātīyānām ca kriyāṇām sādṛśyaṃ nāsti bhukta iva gacchatīti //

種が区別されるべき諸行為には類似性はない²¹。[例えば]「食べているかのように進む」。

解説

パタンジャリによれば、定動詞による比喩表現はない。このことをカイヤタは *Vākyapadīya* III 8,54–58 (*Kriyāsamuddeśa*) の詩節に基づいて解説する。実現対象である行為は完了していない相を持つので、「これはこれだ」という同定ができない²²。従

¹⁹ ある事物が本来持ち合わせていない、活動や様態をその事物に投影すること (BANDINI 1980:142; cf. *utprekṣā*-, BANDINI 1980 : 148)。

²⁰ 以下 VP の詩節番号は RAU 2002による。

²¹ VP III 8,58 *kriyāṇām jātibhinnānām sādṛśyaṃ nāvadhāryate / siddheś ca prakrame sādhyam upamātuṃ na śakyate* 「種が区別される諸行為の類似性は確定されない。[行為の] 実現の過程で、実現対象を喩えることはできない」。

って比喩は起こらない。但し、定動詞の後に *iva* をつけた表現は可能である²³。例えば *limpatīva tamo 'ṅgāni varṣatīvāñjanam nabhaḥ* 「あたかも闇が身体部位を塗りつけるようであり、あたかも雲が[黒い]塗料を降らせているかのようである」²⁴のように喩えられるものが述べられていない表現は *utprekṣā*-「想像」であり、*upamā*-「比喩」ではないとされる²⁵。また行為と結びつくものが行為実現要素であるから、*iva* と結びつく行為を行為主体に重ねること (*adhyāropa*-) はできるが、比喩ではない²⁶。比喩表現は性質を満すものによって性質の欠けるものを表現するが、異なる場で成立する行為間に性質の満たすものと欠けるものは存在しない²⁷。例えば、雁と水鳥の飛ぶという行為はそれぞれ別箇の拠り所に基づくので、行為には喩えるものと喩えられるものという関係は存在しない。また全く種類の異なる行為の間に類似性はないので、比喩は成立しない。

§ 35 【*āsaṅkāyam* を不要とする解釈 3】

Bhāṣya

evaṃ tarhīcchevecchā //

それならこうだ：[Pāṇ. III 1,7で言われる] *icchā*-「欲求」とは欲求のような[もの]のことである。

Pradīpa

evaṃ tarhīti / icchāśabdasya sattvabhūtārthābhīdhāyivād asti tadarthasyopamānatvaṃ tatas cecchāsadrṣe 'pi vyāpāre san bhavati / gaṇamukhyanyāyaś ca kvacil lakṣyāpekṣayā nāṅgīkriyate //

「*evaṃ tarhi*」以下について。*icchā*- の語は実体となった（実体化した）意味を表示するので、それ（欲求）の意味が比喩表現となる。そしてそれ故、*icchā*- と類似した活動の意味でも *saⁿ* が生じる。そして場合によっては、語形 (*lakṣya*-) [の派生] を考慮して、*gaṇamukhya* の道理（性質に基づく意味と額面通りの意味の中、額面通りの意

²² VP III 8,54ab *sādhyasyāpariṣpatteḥ so 'yam ity anupagrahaḥ*.

²³ ヴェーダ語の例については DELBRÜCK 1888 : 477.

²⁴ Bālacarita I 15.

²⁵ Helārāja on VP III 8,53 (ed. by SUBRAHMANIA IYER 1973) *utprekṣā nompamā, upameyānirdeśāt*.

²⁶ VP III 8,55 *sādhanaṭvaṃ prasiddhaṃ ca tiṅkṣu saṃbandhinām yataḥ / tenādhyāropa eva syād upamā tu na vidyate* 「周知のように定動詞 [が表示する行為] に結びつけられる諸要素は行為実現要素であるので、それによって重ね合わせだけが起り得る。だが比喩は見出されない」。

²⁷ VP III 8,56 *nyūneṣu ca samāptārtham upamānaṃ vidhīyate / kriyā cairāśraye sarvā tatra tatra samāpyate* 「欠けているものたちに対して、意味を完成させるための比喩表現が定められている。だが全ての行為は拠り所においてその場その場で完結している」。

味で、文法操作を理解すること²⁸⁾ が取り入れられないこともある。

解説

iva は比喩基準となるものにつけられるので²⁹⁾、実体を備えることになり、比喩表現となり得る。比喩表現となった、当該規則の *icchā-* は「欲求」ではなく「欲求に類似したもの」を意味する。本来は *gauṇamukhya* の道理によって、額面通りの意味で捉えられるので、文字通りの *icchā-* 「欲求」の意味で理解されるべきであるが、ここではこの道理は適用されない。従って意識を持たないものは、欲求ではなく欲求と類似したものを持っているとして理解される。

§ 36 [*āśaṅkāyām* を不要とする解釈 4]

Vārt. 15

sarvasya vā cetanāvattvāt //

或いは全てが意識を持つから。

Bhāṣya

atha vā sarvaṃ cetanāvat / evaṃ hy āha : kamsakāḥ sarpanti / śirīṣo 'dhaḥ svapiti³⁰⁾ / suvarcalā ādityam anu paryeti / āskanda kapilakety ukte tṛṇam āskandati / ayaskāntamayah samkrāmati / ṛṣiḥ pathati – śrṅóta grāvaṇah //

だが寧ろ、全てのものが意識を持つ。次のように [人は] 言う: *kamsakāḥ sarpanti* 「金属製の器たちが這う」、*śirīṣo 'dhaḥ svapiti* 「アカシアが下へと向いて眠っている」、*suvarcalā ādityam anu paryeti* 「ヘンルーダが太陽に従って回っている (= 花が常に太陽に向いている)」、*āskanda kapilakety ukte tṛṇam āskandati* 「茶色のもの (虫?) よ、飛びつけ」と言うとき [虫? は] 草へと飛びつく³¹⁾、*ayaskāntamayah samkrāmati* 「磁石たちが [鉄と] くつつく」、リシは唱える: *śrṅóta grāvaṇah* 「聞け、圧搾石たちよ³²⁾」。

Pradīpa

sarvasya veti / ātmādvaitadarśaneneti bhāvaḥ //

²⁸⁾ Paribhāṣenduśekhara XV *gauṇamukhayor mukhye kāryasampratyayah*.

²⁹⁾ SPEIJER 1886 : 335.

³⁰⁾ Nirṇayasāgar 本: *śirīṣoyam svapiti*

³¹⁾ 草の茎を虫 (?) の方へ差出して呼びかける (THIME 1960 : 315 = *Kl.Schr.* 376, fn. 2)。

³²⁾ *śrṅóta grāvaṇo vidūṣo nū yajñām śrṅótu devāḥ savitā hávaṃ me* 「聞け、圧搾石たちよ、祭式を知る者たちは今、サヴィトリ神は私の呼びかけを聞け」 MS I 3,1 : 29,7~IV5,2 : 64,12~KS III 9 : 27,17~TS I 3,13,1.

rsir iti / vedah sarvabhāvānām caitanyaṃ pratipādayatīty arthaḥ / vaicitryeṇa ca padārthānām upalambhāt sarvacetanadharmaprasaṅgaḥ sarvatra nodbhāvanīyaḥ //

「*sarvasya vā*」以下について。アトマン一元説によれば「全てのものに意識がある」。以上が意図するところである。

「*ṛṣiḥ*」以下について。ヴェーダは全ての存在たちの精神（全ての存在に精神があること）を理解させる。以上が意味である。だが多様に諸事物（*padārtha-*）を知覚するからといって、全てのものに意識という属性が付随することが全ての場合に現れるべきではない。

解説

無生物もヴェーダの例のように意識を持つものとして扱われるならば、*icchā-*「欲求」を表すという解釈を修正する必要はないので、*āsankāyām*の文言は必要ない。

参考文献

BANDINI, Giovanni

Die Erörterung der Wirksamkeit Bhartr̥haris Kriyāsamuddeśa und Helārājas Prakāśa : Zum ersten Male aus dem Sanskrit übersetzt, mit einer Einführung und einem Glossar versehen, Beiträge zur Südasiensforschung, Bd.61, Wiesbaden 1980.

CARDONA, George

“Some Features of Pāṇinian Derivations”, Herman Parret *History of Linguistic Thought and Contemporary Linguistics*. Berlin-New York 1976, pp.137 – 158.

DELBRÜCK, Bert (h) old

Altindische Syntax (= Syntaktische Forschungen V), Halle an der Saale 1888.

DESHPANDE, Madhav M.

Evolution of Syntactic Theory in Sanskrit Grammar : Syntax of the Sanskrit Infinitive -tumUN, *Linguistica extranea, Studia*, 10, Ann Arbor 1980.

堂山 英次郎

「リグヴェーダにおける1人称接続法の研究」『大阪大学大学院文学研究科紀要』、第45巻－2、大阪大学、2005年。

Duden

Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, Duden Band 4, 6. neu bearbeitete Aufl., Mannheim-Leipzig-Wien-Zürich 1998.

HEENEN, François

Le désidératif en védique, Amsterdam-New York 2006.

尾園 絢一

「Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7の研究：意欲語幹（Desiderativ）動詞の機能に関するパーニニ文法学の理解について」『東北大学文学研究科研究年報』第63号、東北大学大学院文学研究科、2014年、pp.(31) – (54)。

「Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7の研究(2)」『東北大学文学研究科研究年報』第64号、東北大学大学院文学研究科、2015年、pp.(101) – (117)。

RAU, Wilhelm

Bhartr̥haris Vākyapadīya : Versuch einer vollständigen deutschen Übersetzung nach der kritischen Edition der Mūla-Kārikās, hrsg. von Oskar von Hinüber, Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Abhandlungen der Geistes- und sozialwissenschaften Klasse, Einzelveröffentlichung Nr.8, Mainz 2002.

SCHARFE, Hartmut

Die Logik im Mahābhāṣya, Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Institut für Orientforschung, Veröffentlichung Nr. 50, Berlin 1961.

SPEIJER (SPEYER), J.S.

Sanskrit Syntax, Leiden 1886, Reprint : Delhi 1998.

SUBRAHMANIA IYER, K.A.

Vākyapadīya of Bhartr̥hari with the Prakīrṇakaprakāśa of Helārāja, Kāṇḍa III, Part ii, Poona 1973.

THIEME, Paul

“Beseelung in Sprache, Dichtung und Religion” *Paideuma, Mitteilungen zur Kulturkunde*, Band VII, Heft 4/6, 1960, pp.313 – 324 = *Kleine Schriften*, Teil I, Wiesbaden 1971, pp.374 – 385.

WEZLER, Albrecht

Bestimmung und Angabe der Funktion von Sekundär-Suffixen durch Pāṇini, Wiesbaden 1975.